
童話二次創作

BG赤坂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童話一次創作

【NZコード】

N9225E

【作者名】

BG赤坂

【あらすじ】

東西問わず、色々な童話をいじりました。

竹捕物語

主人公、竹村^{みかる}美香瑠^{みさる}は竹村^{みさる}美佐枝^{みさえ}のもと母子家庭で育つ。裕福とは言えないまでも、二人は本当の親子のように幸せに暮らしていた。

ところが、美香瑠と美佐枝は本当の親子ではないのであった。

そんなある日、美香瑠の本当の母親、月岡瑠維^{つきおか るい}が現れるのであった。貧しさゆえに我が子を捨てた瑠維は、会社を立ち上げて成功し一度捨てた我が子を取り戻そうとするのであつた。

それに対し、竹村親子は瑠維の要求をかたくなに拒否し続けた。

そんなある日の昼下がり。

瑠維は竹村家のリビングで自分の事情を事細かく話し、美佐枝を説得していた。

しかし、

「あなたにそれなりの事情がある事は分かりました。しかし、美香瑠があなたに引き取られるのを拒む以上、引き渡すことは出来ません。お引き取りください。」

瑠維はただ黙つていた。

『プルルルル。プルルルル。』

電話が鳴った。

「もしもし？」

「もしもし、竹村美佐枝さんですか？」

「そうですが。どちら様ですか？」

「私、村雲というものです。あなたの美香瑠さんを…。」

「美香瑠が何か？」

「美香瑠さんを預かっています。」

「え？」

耳を疑い、今自分が置かれている状況すら整理できない美佐枝に、村雲という男は続けた。

「美香瑠さんを返して欲しければ、身代金として一千万円用意して二丁目の村雨倉庫に日没までに持つて来て下さい。もちろん、警察に通報したり妙なまねをしたりしたら…。」

電話が切れた。

「どうかしましたか？」

瑠維が尋ねてきた。

「美香瑠が…、誘拐…。」

美佐枝はそれだけ言って泣き崩れてしまった。

そんな美佐枝に対して瑠維は冷静だった。

「それで、犯人は何と？」

「一千万円を日没までに村雨倉庫に持つて来いって…。そうだ。警察に…。」

「待つて下さい。そんなことして、美香瑠に何かあつたら…。とにかく落ち着いて、一千万円くらいなら何とか用意できます。待つていて下さい。すぐ戻ります。」

瑠維はそう言つて美佐枝を一人残し、家を出て行つた。

しばらくして瑠維が戻つて來た。

美佐枝は誰かと電話をしていたようで、急々とその電話を切つていた。

「誰と話していたのですか？」

「主人です。」

「何と？」

「すぐに帰ると…。そうだ、お金は日没までに…。」

「大丈夫です。今からでも急げば間に合います。」

瑠維は美佐枝を連れだし、車に乗せ倉庫に向かつた。二人は夕日に照らされているうちに倉庫に着いた。

中には一人の男と美香瑠がいた。

「よお月岡、久しぶりやなあ。」

一人の男、村雲が言つた。

「村雲ー！どうして！」

「竹村美香瑠がお前の実の娘やつてゆう事は分かつとんねん！」

村雲は吐き捨てるように続けた。

「…つふ。」これで長年の恨みが晴らせるわ！」

「待つて、一千万円渡すから、美香瑠を返して。」

「まあ、そう慌てるなや。あの世で一緒にや！」

村雲は懐から銃を取り出し、それを美香瑠に向けた。

瑠維はすかさず村雲と美香瑠の元へと飛び込み、一日足りとも忘れることがの無かつた我が子を庇うように抱き込んだ。

「ねえ美香瑠。今からでもお母さんのところへ戻つてくる気はない？」

瑠維は尋ねた。対し、美香瑠は追い詰められた状況に泣きながらも、はつきり答えた。

「嫌。」

少し間を空けて。

「そつかあ…。やつぱりダメか…。今、あなたのお母さんはどこにいるの？」

美香瑠は瑠維の体越しに、一人たたずむ美佐枝を指指した。

瑠維は笑っていた。

それは最期に我が子を抱くことができた喜び。ではなく、自信に満ち、勝利を確信したような笑みだつた。

その薄意味悪い笑みで裂けた口から言葉が出た。

「村雲ー！」

「はいよ。」

村雲の銃口は美香瑠から美佐枝に向けられた。

「悪いな、俺らグルやねん。」

その時、どこからか大勢の警察が飛び出し、間髪を入れずに村雲と月岡瑠維は取り押さえられた。

さつき、美佐枝は家で一人取り残された時、警察に通報していたの
だった。

美佐枝に主人なんていない。

そのことを瑠維は知らなかつたのは不幸中の幸いだった。

村雲と月岡瑠維は警察に現行犯逮捕され、そのままパトカーで連れ
ていかれた。
続いて、泣きながら抱き合つていた竹村美香瑠と美佐枝も保護され
た。

「お話を聞かせて貰えますか？」

そう言われ、二人がパトカーに乗ろうとした時、地震に襲われた。
たいした揺れではなかつたが、一行は速やかにその場を撤退した。

キノピオの冒険【第一章】

昔々。

子供の好きなゼペットじいさんがいました。

しかし、ゼペットじいさんは子供に恵まれる事がありませんでした。そんなある日、ゼペットじいさんは子供の代わりに、木の操り人形を作りました。

「ふう。完成しただ。名前を付けなければ…。そうだな…、ピノキオ…。いや、キノピオにしよう…どうだ?いい名前だらう。」

……。

「ふう。わしも焼きが回つたか…。明日も早い。そろそろ寝るじよ。」

そう言って、ゼペットじいさんはキノピオを部屋の隅に座らせて寝てしました。

キノピオの眠る部屋に星屑のよつた光が舞い込み、女神様が現れました。

女神様はキノピオに持つている杖を振りながら言いました。

「起きなさい、キノピオ。あなたに声と自由を与えましょ。あなたは自由に動けるのよ。」

杖はさつきと同じ星屑の光を放ち、光がキノピオを包みました。すると不思議なことに、木の操り人形であるキノピオは動き出しました。

キノピオは甲高い声で言いました。

「あれ?動ける?えつ!...言葉も話せる!」

驚きを隠せないキノピオは目の前にいる女神様に気付き、尋ねまし

た。

「お姉さんだあれ？」

「私は西洋の女神。それより、キノピオ。私はあなたに声と自由を与えました。あなたは良い子になるのです。お父さん、つまづケペツトじいさんの話をよく聞くのです。そして、良い子になればよい寝美として願い事を一つ叶えて上げましょひ。」

「ホントに!?」

「約束しますよ。」

そう言ひと、女神様はまっすぐに消えて、再び光となつて窓から出て行きました。

さて、朝になり、田をこすりながら起きたゼベツトジコさんと、キノピオが元気よくあいさつをしました。

「おはよう、お父さん!」

「ああ、おはよう。キノピオ、もう起きていたのか。…ええつ!…」

キノピオが動いて声を出していることにおどろいたゼベツトジコさんは、思わずほっぺたをつねりました。

「なんじや。キノピオが動いてある!キノピオがしゃべつておる…。わしは、まだ夢をみどるのか?」

「お父さん、夢じやないよ。女神様が僕に声と自由をくれたんだ。それに、良い子どもになつたら一つ願い事をかなえてくれるって!」

「おおつ、キノピオ!女神様、ありがとうございます!」

ゼベツトジコさんはキノピオを抱きしめ、それから大喜びで、キノピオが学校へ行けるように準備をしてくれました。

「では、お父さん。行つてきまーす!」

「寄り道をするんじやないぞー。」

「はーー!」

キノピオは初めての学校で廊下の窓から外を見ていた。
始めて家の外に出たキノピオはすべてが新鮮だった。

外にいる動物達を見て驚いた。

さつきまで多くの動物達が楽しそうに遊んでいると、ベルの音が鳴った途端、動物達は校舎の中に走り込んで来て外には誰もいなくなってしまったのである。

キノピオは自分の家にある、ゼペシトじいさんが作ったという掛け時計を思い出した。

あの時計はベルが鳴ると小人達が出て来て陽気な音楽を奏でながら踊り出すのである。

キノピオはちょうどその時計と正反対だと思った。

「キノピオ君。」

不意に声を掛けられ少し驚いたが、そこにいたのは先生だった。先生は人間の若い女の先生だった。

「じゃあ、キノピオ君。先生が合図したら入って来てね。」

そう言つと先生は教室の中に入つて行つた。

「はい。みんなー、席に着いてー。今日は昨日言つた通り転校先を紹介します。入つておいでー。」

教室の引き戸が開いて、キノピオが入つて來た。

「キノピオです。よろしくお願ひします。」

少し緊張氣味に挨拶すると、先生が続けた。

「みんな、仲良くしてね。じゃあキノピオ君の席は…、ジミー君の隣でいいかな?」

キノピオは先生の指差した方を確認し、

「はい。」

と返事して席に着いた。

すると、ジミーから話して來た。

「俺は「オロギのジミー・クリケット。ジミーと呼んでくれ。」

「うん。よろしくね、ジミー。」

キノピオやジミーとは少し離れた席に、ネコとキツネがいました。

「」は隣のキツネに言いました。

「しかし、転校生が木工細工とは魂消たぜ。」

キツネは答えた。

「まあな。それも生きた木工細工とは…。フフッ。」

「兄貴は怖いぜ。何考えたんですか？」

「放課後。着いて来るか？」

「あたほつよ。」

放課後、学校にて。

同級生のキツネとネコはキノピオのところにやつて来て、キツネが言いました。

「よお、キノピオ。お前、この辺の事あまり知らないんだろ？」

「うん。」

「だつたらよお、俺らが面白い場所を教えてやるよ。」

キノピオは田を輝かせながら言いました。

「面白い場所！？」

ネコが言いました。

「ああ。面白い場所だぞ。」

すると、近くにいたジミーがそつとキノピオの背中を上つて、耳元まで来て言いました。

「こいつらとは関わるな。」

キノピオもそつと聞きました。

「どうして？」

「何が何でもだ。」

キツネとネコは詰め寄つてきて言いました。

「行かないのか？」

「後悔するぞお。」

キノピオは答えました。

「つづん。行くよー。」

ジミーは呆れながら言いました。

「どうなつても知らねえぞ。」

ジミーふて腐れてどこかへ行つてしましました。

学校を後にしてしばらく経ちました。

ピノキオはたまらなくなつてキツネ達に聞きました。

「ねえ、どこへ行くの?」

するとキツネは答えました。

「見世物小屋さ。」

「見世物小屋?」

「そうや、君ならきっと、見世物小屋のスターになれるよ。」

「えつ、スターに?」

「スターもスター、君は大スターさ。」

「大スターか、学校よりも楽しそうだね。」

キノピオは、キツネとネコについて行きました。

さて、見世物小屋の親方は人間の男でした。親方はキノピオを見る
と大喜びで、キツネとネコにお金を渡しました。

「さあさあ、世にもめずらしい、自分でうごく人形だよ!」

キノピオが舞台に出て踊ると、お客様はしばらくビックリして、
その後はわれんばかりの大喝采。

「わあー、ぼくはスターだ!」

キノピオは嬉しくなつて、夢中で踊りました。

そして日が暮れる頃、舞台は大盛況の中、幕を下ろしました。
キノピオは見世物小屋の親方に言いました。

「今日はとつても楽しかったよ。じゃあもう遅いからバイバイ。」

そしてキノピオは帰ろうとしました。しかし、親方はキノピオ
の肩を抑えて言いました。

「待ちな。お前は帰れないぞ。ずっと住み込みで働いてもらひ。
キノピオは困りました。」

早く帰らないとゼペットじいさんが心配する」とに気付いたのです。

キノピオは何とか親方の手を振り払おうとしましたが、人間の男である親方の力には叶いませんでした。例えキノピオが声と自由を手に入れたところで所詮キノピオは操り人形。キノピオの力は人間の子供が持つ力にも満たないのです。

しまいに、キノピオは親方に殴られてしまいました。キノピオは、殴った親方もビックリする位、遠くの壁まで飛ばされました。キノピオはすっかり伸びてしまい、気が付くと鳥力ゴヘ閉じ込められました。

「あーん、どうしよう。家へ帰りたいよー。お父さんに会いたいよー。」

閉じこめられたキノピオが泣いていると、ビニから声が聞こえました。

「だから言つただろ。」

「誰？」

ジミーがキノピオの服に付いているポケットの中から出てきました。

「じめんよジミー。さっきの事は誤るから助けてよ。」

「無茶を言つな。俺にもできる事とできない事がある。」

しばらくすると、夜空からスースと光がさし込み、西洋の女神が現れました。

「あらキノピオ、どうしてこんな所にいるの？寄り道をしない約束は？」

「どうしてって…。」

キノピオは、本当の事を言つたら、人間の子どもにしてもらえなくなると思い、うそをつくことにしました。

「実は家へ帰る途中、いきなり見世物小屋の親方につかまつたんです。」

そのとたん、キノピオの木の鼻がズンと伸びていきました。

「あれあれ、どうして？ 鼻が伸びていくよ。」

あわてるキノピオに、西洋の女神は言いました。

「キノピオ。いま、嘘をつきましたね。あなたの鼻は嘘をつくと、ドンドン伸びていくのですよ。」

「嘘じやないよ。本当だよー!」

キノピオがそう言つと、ズンズンと、またまた鼻が伸びてしましました。

西洋の女神は、きびしい顔で言いました。

「いいですか。嘘というものは、一つつくと、新しい一つを重ねてつかなくてはならなくなります。キノピオ、あなたは良い子に、なりたくないのですか?」

「なりたいよ!良い子になりたい!女神様、嘘を言つてごめんなさい!」

キノピオが泣きながら叫ぶと、西洋の女神は魔法の杖をクルリとふつて、のびた鼻を元通りにしてくれました。

そして、キノピオが閉じこめられている鳥力ゴのカギを開けて、言いました。

「助けてあげるのは、今度だけですよ、キノピオ。がんばって、きっと本物の良い子になるのですよ。」

そう言つと、いつの間にか腰を抜かしていたジミー、西洋の女神はやわしく言いました。

「ジミー・クリケットですね?もしよろしければ、これからもペノッキオが良い子になれる手伝いをしていただけませんか?」

「えつ!わたしの名を」存じで!さすがは西洋の女神様。かしこまりました。このジミー、ペノッキオが良い子になるよう、頑張らせていただきます!」

「うふふふ。ありがとうございます!」

女神様は微笑むと、星へと帰つて行きました。

ジミーはキノピオをつれて、ゼペシトじいさんの家へ帰りました。それからキノピオは、女神様との約束を守つて、良い子で楽しくすごしました。

ゼペットじいさんは、とてもキノピオをかわいがり、キノピオもゼペットじいさんの事が大好きでした。

その日の夜。

例のキノピオを捕まえた見世物小屋は火事に遭つたそうです。

第一章へと続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9225e/>

童話二次創作

2010年12月24日02時59分発行